

# 「ことばの教育」パイロット校事業 報告書

学校名	広島県立広島工業高等学校
校長名	寺崎 光
所在地	広島県広島市南区出汐二丁目4番75号
H P	http://www.hiroshima-th.hiroshima-c.ed.jp/
学級数	25学級
タイプ	I      •      II

## 1 研究の概要

### (1) 研究主題

「ものづくりの体験を活かした『ことばの教育』の推進  
—体験をことばで伝え合う言語活動の展開を通して—

### (2) 研究のねらい

- ① 国語科を中心に、生徒に「言語技術」を習得させる取組みを行うとともに、習得した「言語技術」を活用して、「ものづくり」の体験を他者へ伝える言語活動を展開する。
- ② 生徒に「ものづくり」体験を豊かに行わせ、その体験から得られた感動や考えを、確かな言語技術をもって表現させる教育活動を展開する。
- ③ 生徒にコミュニケーションにおける「ことば」の大切さに気付かせることにより、他者の立場に立って考える態度を身に付けさせ、社会に役立つ「ものづくり」に向けた創造性を育てる。
- ④ すべての教員が「言語技術」について研修し理解を深めるとともに、自らの言語使用を反省し適切な言語活動を行う。

### (3) 研究組織・体制

国語科が中心に計画を立案し、校務運営会議にて工業科等へ研究・実践の方向性を確定し、研究を推進する。

## 2 2年間の取り組みの概要

### (1) 平成17年度

#### 1 学期

「ことばの教育」パイロット校事業についての説明および「言語技術」の概要説明、校内「ことばの力」意識調査、本校「ことばの教育」パイロット校事業の取組み指針ならびに実践目標の提示、公開研究授業、国語科内研修会の実施

#### 2 学期

県教育委員会「ことばの力」意識・実態調査実施、授業分析、公開研究授業、校内「言語技術」教育研修会の実施

#### 3 学期

授業分析、国語科内研修会、校内「ことばの力」意識調査、校内「言語技術教育」研修会、平成17年度の成果と課題のまとめおよび次年度の実践目標策定の実施

### (2) 平成18年度

#### 1 学期

「ことばの教育」パイロット校事業の取組み指針及び実践目標の確認、校内「ことばの力」実態調査、校内「言語技術」研修会、公開研究授業の実施

#### 2 学期

校内「ことばの力」実態調査、教職員対象「ことばの力」に関する調査、校内「言語技術」研修会、公開研究授業、「ことばの力」意識調査の実施

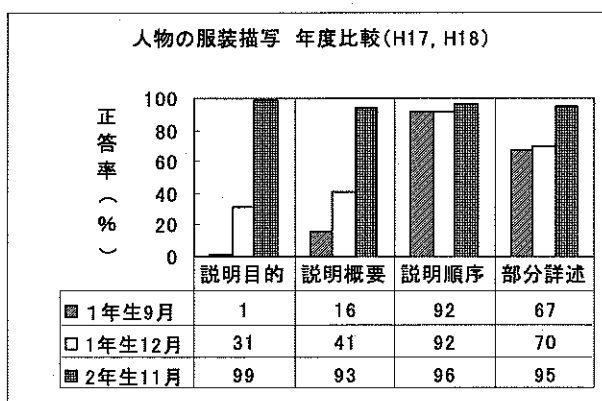
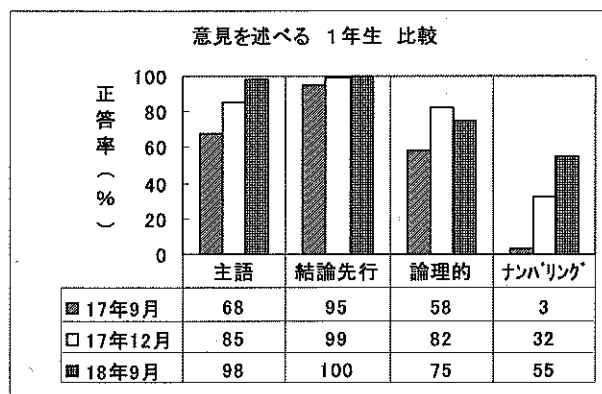
#### 3 学期

公開研究授業、校内「ことばの力」実態把握、平成18年度の成果と課題のまとめ

## 3 研究の成果と課題

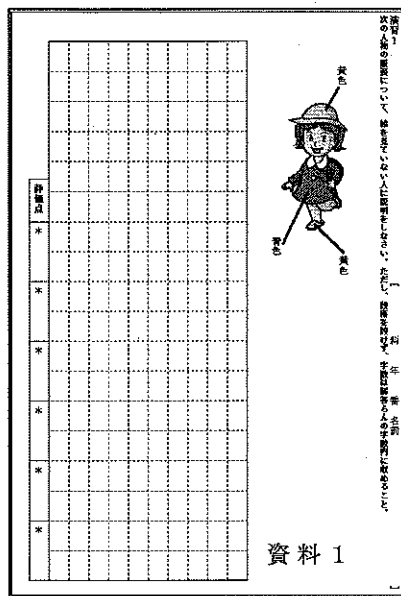
### (1) 成果

- ① 校内「ことばの力」実態調査にみる平成17年度1年生と平成18年度1年生との比較

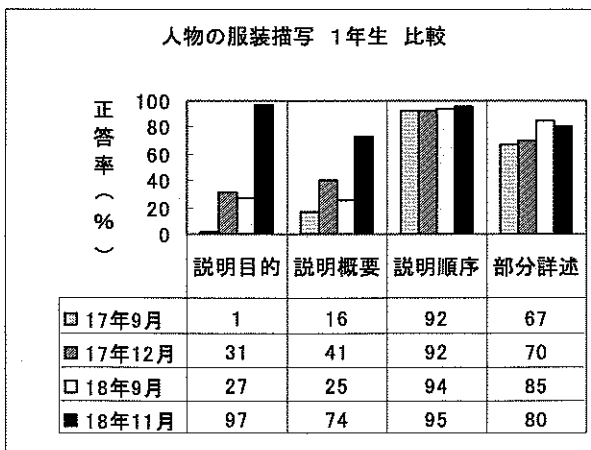


平成17年度1年生と平成18年度1年生との比較では、全体的には、平成18年度1年生の方が言語技術における問答の技術と情報伝達の技術（説明の技術）は身に付いていることがわかった。これは、1年生においては、4月から計画的に「言語技術」の指導に取り組んできた成果である。国語科においては、「言語技術のレッスン速習版」を副教材として採用し、授業計画表に4月、7月、9月、12月、3月に集中して行うように位置付けた。また、日々の授業において意識的に「言語技術」に関わる取組みを行った。

たとえば、授業はじめに10分間で絵の描写を行った。導入当初は、口頭で絵の「描写」をさせた後に原稿用紙に書かせた。ここで、「描写」をするときのポイントである「主語」「説明の目的」「説明の見通し」「説明の順序」「特徴」「説明の終わり」の指導を行った。3回目からは、プリントを配付してすぐに「描写」をさせ文章を書かせた。用紙には原稿用紙の枠の外に評価点が記入できる枠を作った(資料1)。評価される項目が明確になり生徒は評価項目について意識して課題を行うことができるようになった。実際の授業では、「人物の服装」を説明する課題について、クラスの生徒のうち90%以上が正しく説明できるようになるまで問題を替えながら継続して行い、その後、「人物の様子」を説明する授業へと展開していった。その結果、生徒は、絵の「分析」をとおして「描写」や「説明」の技術を身に付けていくことができた。



② 校内「ことばの力」実態調査にみる年度比較



平成18年度の2年生が1年時に実施した調査結果と比較してみると、情報伝達に必要な技術はどれも正答率が70%を超えており、一定の説明の技術が身に付いていることがわかる。これは継続的な学習の取り組みの成果である。この成果を生かすためには、いったん「分析」の技術を情報伝達の技術とともに身に付ければ、後は反復練習である。少しずつレベルを上げることで、生徒の知的好奇心は刺激され、意欲も高まった。

(2) 課題

「言語技術」の習得を目指した授業の取り組みは昨年度よりも広がってきた。特に専門教科の実習形式の授業で、表現することに対する見通しを持たせる学習・作業をすることに力を入れることができた。しかし、次の2点に課題があると考えており、今後、取り組みの充実を図ることが必要である。

【まとまった文章を読み取って表現させること】

「広島県高等学校共通学力テスト」(国語)における書く力を問う問題の結果から、自分の意見を論理的に述べる力に課題があることが明らかになっている。今年度までの取り組みによって「言語技術」の基礎的な技能は定着しているが、まとまった文章を読み、その内容を比較した上で、自らの意見を述べることに対応することができていない。特に、「意見を筋道立てて述べる」と「叙述と語句の選択と使用」とに課題がある。生徒に比較的長い文章を読ませること、視点を明確にして分析させること、事実と意見を明確にすることなどについて、来年度はさまざまな科目の授業において年間を通して計画的に取り組む予定である。

H17, 18国語A論	分量	構成	叙述	語句の 選択と 使用
述通過率比較 (%)				
H17正答率	73	72	47	64
H18正答率	65	64	36	46

H17, 18国語B論	分量	構成	叙述	語句の 選択と 使用
述通過率比較 (%)				
H17正答率	60	60	37	45
H18正答率	68	66	27	60

【学んだ知識や技能を実習や実際の場面で活用させよう】

身に付けた知識と実習とを関連付けた学習が十分行われていない。学んだ知識や技能が実習場面で関連付けられ、生徒が知識や技能を実際の場面で活用するような授業展開を目指す必要がある。具体的には、授業者は生徒に様々な授業の場面で「分析」「説明」「表現」させるような授業を創造する必要がある。

また、「ことばの教育」に取り組む学校として「育てたい生徒像」をさらに具体化する必要がある。「ものづくり」に携わる人材として求められる能力を踏まえ、本校ではどのような人材をどのような方法によって育てるのかを明らかにしていくことが必要である。